

2024年2月1日取材

熊本県

産地レポート

ニンジン

耐寒性にすぐれ歩どまりのよい

「冬^{ふゆ}ちあき」

熊本県JA菊池でも好評

(編集部)



JA菊池管内

菊池地域は、熊本県の北東部に位置します。東部ならびに北部は阿蘇外輪山系を有する中山間地、西部ならびに南部は菊池川・白川流域に広がる台地・平野部で自然豊かな地域です。

交通網は国道を中心に整備され西端は九州自動車道が、南端には空の玄関口として阿蘇くまもと空港があり、農畜産物の輸送に大きな役割を果たしています。

年平均気温は約16℃、年平均降雨量は約2,055mmで比較的温暖ながら夏は暑く、冬は冷え込みが強い盆地型気候です。

管内の露地野菜栽培は菊陽・大津地区が中心です。近年菊陽町は半導体世界大手のTSMCの熊本工場が建設され大幅な人の流入といった側面も見せています。



地域概況

ニンジン栽培

管内の菊陽町および大津町は阿蘇山のふもとにあり、その火山灰土壌を生かした甘藷栽培なども盛んです。JA菊池人参部会は60戸の生産者数で、菊陽地区の生産者は40戸です。集出荷場では機械選果が導入され、大津地区は20戸弱の生産者が個選共販体制となっています。ニンジン栽培は11月～6月まで出荷され、大きくは秋冬品種と春品種に分かれますが、秋冬ニンジンの延べ面積は125ha(2023年度)ほどです。ちなみにトンネルを張る春ニンジンは菊陽地区が中心です。大津地区は風が強くトンネルが張れないそうです。

出荷は県内、福岡のほか広島、岡山、姫路、京都です。午前中に持ち込まれたものを洗って箱詰めされ次の日に出荷となります。物流面では2024年問題もにらんで数年前から2日後セリ



↑次々200kgサイズのフレコンバッグで運び込まれる管内のニンジン。



↑泥を落とし、段階を経てブラシで洗われている。



↑3L～Sサイズ、優、秀に選果される。



↑「冬ちあき」を手にJA菊池営農部南営農センター長の岩木憲一氏



↑単価がつく価格帯はMサイズの秀品。

で問題ないということを確認し、出荷形態を変更しました。

「冬ちあき」の導入

九州の熊本という温暖地のイメージがありますが、日中は暖かいものの阿蘇山側から吹きおろしもあり冬場は圃場に霜が降りて葉がやられることも多いそうです。秋冬ニンジン収穫時期に合わせて5品種が指定されています。機械収穫が一般的ですが、寒さが厳しくなり霜が降りると機械収穫ができなくなるため、12月下旬以降は葉の耐寒性が求められています。現在秋冬作の最終は9月10～20日まきの「優馬」が作付けされており、葉の耐寒性の強さから使用されています。「冬ちあき」は3年間ほど部会役員方の試作を経て導入され、最終作の前8月20日～9月5日の作型で今年から準指定品種として栽培層に掲載されました。

「冬ちあき」が評価されたのは「優馬」には若干劣るものの葉の耐寒性にすぐれ、ほかの品種と比べて根部の割れが少なく歩どまりがよかったことでした。「冬ちあき」が導入される12月下旬～2月中旬収穫は生産量が最も増える時期、葉の強さだけでなく「そろいのよさ」「円錐型でなく総太り型で箱に詰めやすい」点も評価される特長です。通常Mサイズの150gが中心で10kg入

箱に70本入りとなります。今年は暖冬傾向で肥大が速く、2Lサイズ、Lサイズが多い年で200g前後なら50本入りとなります。

これから

高齢化が進む中、個選をする方も減少傾向とか。人を雇うにも工場建設など働き口の増加で人件費が値上がりしています。今後ますます機械化を望む声は増えてくるでしょう。高齢化や労働力不足への対応から、今後は播種から収穫、選果、箱詰め、出荷まで一貫した機械化体系の導入も進んでいかにするを得ないと思います。そうしたときに機械収穫やそろいと秀品率が高く歩どまりのよい品種が求められてくるでしょう。「冬ちあき」がそうした産地課題解決の一助になることを期待しています。



↑生育中の「冬ちあき」。